

こうして
ヒット商品は生まれた!

『ポップコーンゆび筆』

墨運堂



指に直接はめて書く新感覚の筆。タッチパネルを操作するように、誰でも手軽に字や絵が書ける

会社データ

社名 株式会社 墨運堂
住所 奈良市六条 1-5-35
代表者 松井茂浩 代表取締役
創業 文化2年
資本金 3000万円
従業員 90人

墨や筆などの書道用品を製造する墨運堂。平成21年に筆の常識を覆す商品「ポップコーンゆび筆」を生み出すと、あっという間に7万本を売り上げ、昨年は第36回日本ホビーショーでホビー大賞に輝いた。現在もコンスタントに売り上げを伸ばしているという。文化2（1805）年創業の老舗が、画期的な商品を開発したきっかけとは――。

時代にふさわしい商品づくりを志向

「ポップコーンゆび筆」は、指にはめるホルダーが色も形もトウモロコシを思わせることから名付けられたユニークな筆だ。紙をめくる指サックに筆を付けたような形状をしており、指で字を書いたり絵を描いたりするような感覚で使うことができる。複数本を同時に指にはめて絵を描くこともでき、脳と指が一体となる「直感文具」がコンセプトだ。

200年以上の歴史ある老舗が、なぜこれまでの常識を覆す筆を開発するに至ったのか。そもそも奈良県は千数百年にわたって墨づくりが続けられてきた歴史ある地であり、筆の生産地としても知られている。しかし、書く文化の衰退により、墨・筆ともに売り上げの減少が深刻化。墨運堂も例外ではなく、安価な輸入製品との価格競争にもさらされ、伝統を守りなが

ら新たな利用者層を開拓する必要に迫られていた。

「守りの姿勢で伝統は守りません。新しい発想で時代にふさわしい商品づくりを志向して、初めて伝統が勢いづき、技術も継承されるのです」と説明するのは、専務取締役の松井孝成さん。同社の基本理念は「伝統技術の上に近代技術を取り入れて今日に活きる商品を創り出す」。ゆび筆は、まさにその理念を体現した商品なのだ。

発想のきっかけは、電車内で目にしたある光景だった。幼い女の子が、曇った窓ガラスに指で絵を描いている姿にピンとききたのだ。指で絵が描けたら楽しいかもしれない――。早速、試作品づくりに取り掛かったが、出来栄は散々だった。

「見た目が悪く、フィット感もなければ使い勝手も悪いと、お蔵入りになってしまいました」と松井さんは苦笑する。だが、10年後にあるデザイナーの協力を得たことで



◀「必要としてくれる人がいる。そう思うと励みになりますし、だからこそ商品をつくり続けることができました」と語る松井孝成さん

産学連携による共同開発で課題をクリア

そんなときにふと思い出したのが、お蔵入りになったゆび筆だった。そのデザイナーが紹介してくれた大学教授に相談してみると、

一気に具体化することになった。「当社製品のデザイン監修を外部のデザイナーにお願いすることになったんです。最初は絵墨といって、墨と同じ材料を使いながら、赤・黄・青・緑など、墨をベースにしたモノトーンの色合いが出せる道具をつくってみました。他にもっと面白いものがつくれないかと話し合っていました」

子どもの教育ツールとして使えるのではないかとというアドバイスをもらった。そこで、墨運堂の職人、デザイナー、そして教育の専門家である大学教授による共同開発が始まった。

「社外の専門家にパートナーとなっていたことで、方向性が定まりました」

試作を重ね、子どもたちにも使ってもらい、感想を設計にフィードバックしていった。しかし、これが想像を超える難しさだったという。「人間の指というのは、100人いれば100人が違うものなんです。太さも長さも微妙に違うため、フィット感がなかなか得られない。そこで人体測定の専門書を読みあさったり、専用の測定機を購入したりするなどして探っていきました。締め付けがきついと指先がうっ血して腱鞘炎になりかねない。諦めかけたこともあります」

強力な援軍となったのが、畿央大学健康科学部の中山順准教授と岡田洋平助教だった。人間工学の知見を得るだけでなく、産学連携による共同開発を依頼し、指先の入る先端をすばませた、現在のタコの足のような形状を考案してもらったのである。これにより、指にしっかりとフィットするよう

になり、さらに中央部を膨らませて締め付けをなくしたことで、使い勝手が格段に良くなった。

重い障がいのある子どもの成長が励みに

もう一つの課題が筆だった。「筆先を軽く上げ下げして書くようなところを、子どもたちはぎゅっと押し付けたりするんです。すると、一般的に使われている獣毛では元の形状に戻らず、筆として使いにくくなってしまつたのです」

そこで、水含みが良く滑らかな人工毛を採用することにした。さらに発売に先立って、全国の幼稚園、保育園、障がい者養護施設、介護施設などで実際に使ってもらい、細かな改良を加えていった。

そんな中、大きな励みになったのが、手足に重い障がいがある少年との出会いだった。「生まれつき手足の筋力が弱く、車いすと介助が必要なお子さんでした。周りの児童が絵を描くのを見て、自分も描きたいと思いを表示するのですが、握力が非常に弱いため絵筆をうまく持つことができなかつたそうです。でも、ゆび筆なら握力が弱くても筆先を動かすことができる。絵だけでなく、自

分の名前もすっかり書けるようになったそうです」

授業でゆび筆を使った教育関係者からは、子どもたちが目を輝かせて文字や絵を描いているという声が寄せられており、さらに介護施設でも、認知症の進行予防や入居者同士の交流促進につながるなど、その効果は高く評価されている。

ゆび筆の可能性は、絵や書だけにとどまらない。同社は化粧品業界への進出も検討しており、化粧品が特に高齢者のメイク道具として使ってもらえるのではないかと考えているという。専門学校でメーカーキヤップを勉強している学生たちと「ゆび筆メイク」のワークショップを開くなど、新たな販路の開拓と商品の研究に余念がない。

「ゆび筆は脳と指と画面がつながり、自分の意思をダイレクトに反映できるといわれています。これからも必要としてくれる人がいる限り、地道につくり続けていきたいと思っています」

書く文化を復活させ、新市場を切り開く……。そんな松井さんたちの思いが、伝統技術と近代技術を融合させた商品を生み出したのだ。

(文・麻生寿)